

「論理学」による自殺の諫止

— デューイの論理思想から^① —

麻生享志

引用は全て〈 〉でくくり、「」は論者による強調その他を示す。引用箇所における「……」は中略、[] 内は論者による補足である。文献略号は、それぞれ次のものを意味する。すなわち：L = "Logic — the Theory of Inquiry" (Later Works, Southern Illinois University Press, 1981-1990. = LW. vol.12, pp.1-527). TV = "Theory of Valuation" (LW. vol. 13, pp.191-251). VJ_IQ = 'Valuation Judgments and Immediate Quality' (LW. vol. 15, pp.63-72).

(1) 予備的考察

「論理学によって自殺を諫止する」という問題設定の周辺を考えておこう。まず論理学性と諫止ということによって課される意味的制限を検討し、次に「自殺」の型を、さらに最後に自殺志願者の備える資質について、予備的に考察する。

基本的方向性 まず自殺に対して、ここでわれわれが検討しようとする姿勢や基本的方向性について整理する。われわれは「諫止」を問題にする。すなわち、自殺という行為の選択に対して、ここでは、否定的な立場を採り、自殺をさせないという仕方働きかけることのみを検討材料にする。もちろん、論理学がこの種の問題に立ち向かった結果、自殺を必ずしも否定せず、容認や、或る場合には勧奨するという成り行きも考えることはできる。しかし今は、論述上の必要から、自殺を止めさせることのみを取り上げる。

またこの「諫止」という表現は、制止手段への言及も含んでいると考えられる。つまり、基本的に言説を中心にして自殺志願者に働きかけ、「思いとどまらせる」のである。「諫め」によって制止するのであるから、暴力的な手段は論外なのである。しかしそれ以外にも、「自殺を」諫める、のであるから、除外すべきものはある。たとえ論理的に、言説を中心にして導出した結論で納得させても、自殺の回避が「間接的」であるならば、これは除外すべきであろう。例えば、かつて行った特定の約束行為について考察し、約束を果たす義務を論証し、そのためには間接的な条件として生

「論理学」による自殺の諫止（麻生）

存の継続を必要とする —— などといった論理展開が考えられる。

論理学=条件 しかし言説を中心に自殺を制止するといっても、論理学以外の仕方も、多数考えられる。一つには経済的なインセンティブによって自殺を回避させることができるかもしれない。あるいは何らかの外的規則を定めて、ないしは既に定められている規則を提示して制止することも可能かもしれない。宗教的戒律による禁止や、法的規制や、確立され承認されている習慣・道徳などへの背反を、意識させたり理解させたりすることで自殺への決意を鈍らせることができるならば、それは言説中心の制止であり、諫止であると呼べるだろう。この意味では、経済学・法学・倫理学などによる制止の試みよりも一層効果を期待できるのは、「弁論術・修辞学」的説得ではなかろうか。演説で人々を説得し、利益衝突を巧みに調停し、敵に離反を起こさせ、儀礼的な面で外交交渉を有利に運ぶような老練な政治家に要求される能力はこれであり、また商取引でもこの種の能力は大いにものを言うであろう。さらに、おだてやごますりの名人とか、人をする気のなかった行為に駆り立てるに巧みな詐欺師とか、催眠術的洗脳に熟達した人ならばなお有望である。

ではそのようなものではなく、論理学的な諫止とは何であるか。さしあたり、論理学的諫止は、終始真理を重要な主題として意識する点で詐欺師の方法とは違い、また直接考察されないような外的⁽²⁾な利益や規則に訴えない点で宗教者などの方法とは違うと主張するにとどめておく。

ちなみに、カントがアリストテレスの名を挙げて是認を表明(“Kritik der reinen Vernunft” B VIII)した、あの演繹体系中心の学校論理学を用いるとどうなるのかは興味をそそる問題だろう。この種の論理学は、「与えられた」命題を大小の「前提」として操作する作業に大いに関心を示すであろう。まず自殺志願者が語る諸命題の連鎖に耳を傾けて、それらを検査する。そして概念の自己矛盾を導出したり、誤謬推理（命題同士の無関係性、媒概念の二義性など）を点検して指摘したり、推理の不完全（論法の循環など）を発見したりする。その点に、この種の論理学の有効性は認められてよいであろう。しかしその志願者が自殺動機について語る時、もし命題を連鎖させて饒舌に語るわけではないならばどうであろうか。「論理学的」諫止は、アリストテレスの論理学に拠っては、難航することが予測される。そういった系統の論理学者は、その時論理学的操作の対象となる諸前提を必要とするであろう。こうした前提は論理学外のものとして、（志願者本人が語らない以上）例えば哲学者・形而上学者から与えられ借りて来なければならないであろう。しかもそれらの命題の全てに、十全

「論理学」による自殺の諫止（麻生）

な同意を相互に与えた上でなければ、この方法を発動することはできない。また志願者の説明において、主張自体は整合的であって、理路整然と「理屈」がなげられていたならば、やはり手も足も出ないであろう。では、デューイの論理学・論理思想に拠ったならば、この問題はどういうことになるであろうか。

自殺の「型」分類 しかしその前に、自殺についても若干の考察を必要とする。

「自殺」とひとくちに言っても、動機からしても多種多様であろう。一般的理解における自殺概念に合致するのは、自己の生命よりも大切に思われた何かを考えて、それを得る為に、あるいは守る為に死ぬことであろうか。これらは目的自殺と呼べるであろう。そして目的を実現して得るものは、自殺者本人のものである場合と、残された本人以外の人のものである場合が想定できる。しかしこのような積極的な目的自殺だけが、自殺の全てではない。将来の生命継続に対する否定と拒否に、自殺の主な動機が置かれる場合を考えることもできる。あえて言えば、苦痛からの解放を「目的」としていると言えなくはないが、多少の違和感を残すであろう。だが現今では、一般的に自殺はこうした将来否定的契機によって、すなわち生活苦・病苦・老苦（孤苦）などから説明されることが多いようにも思う。

しかしここで、重視する種類の自殺は、目的的なものでもなければ、将来否定的なものでもない。それは、抽象的厭世自殺とでも名付くべき自殺である。それは生を端的に無意味と感じる。その自殺は、将来生ずる苦痛に対する否定なのではない。その人は生きる意味それ自体に対して懐疑的なのである。それは、人生における諸意味付けの、完全な放棄でもある。人生の上で何が起ころうとも、喜びや悲しみといった具体的内容によって動じることがなく、それらを等しく無意味と思うのである。この立場からは、何を行っても可であり、従って自殺も避けるべきこととは思われない。もちろん、強く自殺を行う必要に迫られることもないわけだが、またそれを退けなければならない明確強固な理由もほとんど見出さない。従って理論上この立場においては、きわめてとるにたらない小さな事柄も自殺という結果（自殺を是とする結論）に結び付くであろう。そして今（まだ）生き続けているということは、強烈ではないが一定の強さをもつ死への誘惑にいつもさらされているということであろう。おそらくこのような考えの人は、単に理論的に見るならば、冷静に、つまり自己の行為を認識・検討しつつ確実な手段に拠って自ら死んでいく可能性が高いとも思われる。

自殺志願者側の条件 最後に自殺志願者の資質についても、一つの制限を設けなければならない。この志願者は、自殺行為の可否について論理的な検討を受け容れ

られる人物でなければならない。衝動的に身を投げようとしている人を見て、その行為を止めようとすれば、いきなり後ろから抱き止めるよりほかはないであろう。ビルの屋上などで、周囲の説得に耳を貸す様子もなく「絶対に死んでやる」などと叫んでいたら、そこで論理学を説こうとするのはむしろ滑稽に属する。銃口をこめかみにあてて今にもひきがねをひこうとしている人に向かって、「君の命題を一つの前提とする三段論法において、媒概念の周延関係は……」などと論じて諫止しようとするならば、それは非常識を通り越えて狂気のさたとしか言いようがない。ここで想定される自殺志願者は、一定の知的レベルに加えて、冷静かつ客観的に行為手段・結果・目的・概念内容などを考察する余裕をもつ者でなければならない。そこで、毒杯を前にして悠々と死を論じ、ユーモアさえ交えつつ死後の世界と靈魂不滅を考察した、プラトンが描き出すところのソクラテスのような人物を志願者として考えよう。そしてなろうことなら、志願者も説得者と共に論理学者であるとする極端な想定を行おうとさえ思う。

(2) デューイにおける「論理学」と倫理学

この種の問題設定が意味しているのは、どういうことか。それは、論理学にとって外的なものに直接訴えることをせずに、また論理学が真理に関わるものであるという特徴を保持しながら、倫理学的な行為の問いに対して何を与えることが可能であるかという論理学と倫理学との結合のあり方の問題である。

論理学と倫理学の関係は、デューイによれば、次のように主張される。〈私〔デューイ〕の価値判断の理論は、彼の〈知識についての一般的理論、判断と検証についての一般的理論〉の〈特殊な事例である〉(VJ_IQ p. 70)とされ、価値判断の理論は知識理論から派生したもののように扱われている。ここから、一般的知識理論を価値判断という特殊分野に応用するという発想を読みとることができるだろう。ここで私はこの「知識についての一般的理論」と呼ばれているものを、彼の「論理学」とであると解釈している。このような解釈を採り、論理学と自殺の諫止を結び付けて考えることは、「行為選択肢の是非を論じ、複数の選択肢から一つを選びとり推奨すること」を倫理学的内容の主要な問題と見た上で、「価値判断の理論」と重ね合わせて考えることを意味する。つまり上掲の引用箇所は、論理学は倫理学にとっての一般的理論という役割を持つということ、デューイの論理思想における学説は倫理学という特殊個別な分野で応用されるということを主張していると言えるであろう。

「論理学」による自殺の諫止（麻生）

もう一つ、デューイの論理学と実践的問題・価値の問題とについて、両者の関係に関する彼の主張を引用しよう。〈全ての制御された探究、全ての根拠ある言明の確立は、必然的に実践的な要素を含む。〉（L p. 162）〈論理学にとって……重要な点は、これらの価値付け的判断は……全ての探究終結的判断の形成に入ってくるということである。〉（L pp. 175-6）論理学は、デューイにとってそれが正当なものであるためには、実践的要素を含んでいなければならない。このことは「全て」の場合にあてはまり、「必然的」なのである。これはデューイの建設しようとした論理学の構想が、（自然科学的な意味で）「実験(experiment)的」なものであったことが関係している。実験は、非常に実践的なものであり、状況の存在的な変容を意味している。他方、実験主義的方法と共に重要な事柄として、次のこともあわせて注意したい。デューイにとって論理学は、探究(inquiry)と深い内的な関りを持っているが、探究というものはそれ自体極めて実践的な事柄であり、成功という価値的なものを目的とする「目的論」的側面から離れることのできない操作・行為であるということである。実験と、探究の目的論性を同時に考慮すると、そこにデューイの考える論理学の概略的な姿が浮かび上がってくる。すなわち「デューイの論理学」とは、問題を生起させた状況を、実験という実践によって存在的に変容し、そうした変容によって探究を成功させる目的論的過程（の解明）である。論理学（ないし知識・判断の一般理論）と探究との関係について、デューイが、『論理学 — 探究の理論』において、（認識過程論的）論理思想・真理論の集大成として、探究の理論(theory of inquiry)としての論理学（への〈接近〉（L p. 47））を志したものであることも注意しておこう。

さて、現今において最も有力な探究事例で、成功が広く認められているものとしてデューイは自然科学的探究を中心的にとりあげる。つまりデューイの論理学の課題は、〈科学的諸結論と方法に基づいた論理学的理論の必要性〉（L p. 85）に應えることである。そして自然科学に基づく論理学の核心的な部分の一つが、実験主義である。〈実験操作とは為すこと・作ることの形式である。為すこと・作ることを媒介にして観念・仮説を存在的な(existential)素材に適用することは、科学的方法の本有的構成物なのである。〉（L pp. 434-5）ここから、論理学が（実験を介して）実践性を必然的な性格とすることが発生する。

デューイによって一般化された、成功に導く自然科学的探究のパターンとは、次のようなものである。すなわちまず問題の所在を認めたら、データを収集して、それらを考察する。問題を解決する実験の仮説を形成できるというところまで考察が進めば、その仮説に基づいて実験が行われる。実験が問題を解決して探究が成功する時、それ

「論理学」による自殺の諫止（麻生）

は終結できるが、そうでない時には可能な限りデータ収集（観察）・考察・仮説形成・実験的操作が繰り返される、というものである。（L ch.6）

このような知識と判断の一般理論・探究の理論・論理学をいかに応用すれば、倫理的探究に関する理論が得られるのか。この場合問題を生起させた状況は、型にはまった行為以外の行為を選択する可能性に直面している状況である。その状況における存在するものから収集されたデータをもとに、採るべき行為について考える。探究を始めたそもそもの最初から、行為を通じて目指される満足のありようが想定されていることも多い。その場合に採られているのは最適な手段である。しかしそうした場合でも、目指される方のものは固定的なものであるとして吟味を避け、改訂可能性を否定することは適切ではない。ここには目的設定という課題がある。探究を通じて、目的は端的に変えられたり、その秘めていた意味があらわになったり、一部を手直しされたり、拡張されたり緩和されたりするであろう。それらの検討も探究の仕事である。

（目的をあらかじめ一挙に獲得するというような方法は批判される。それは、目的を固定することであり、絶対化・実体化であり、探究を硬直したものににする。） 目的が或る程度固まってきたら、その目的に適った手段が考察される。手段は、思考の中では仮説であり計画である。そうした仮説形成の作業の中で扱われる意味・観念は、仮説として必然的であり得る（必然性を「仮想」できる）。こうして得られた仮説を実行するのが、この場合、実験に当たる。実験でこれらの存在的なものがうまく処理され、探究が成功し、問題状況が解消される過程がデューイの考える論理学である。

意味・観念の考察は、推論という操作である。この時既に触れたアリストテレス風論理学（形式論理学）が一定の効果を果たすことが期待される。（当初気付かれていない）自己矛盾・誤謬推理・推理の不完全が、推論によって見出され修正される。この意味で、デューイの論理思想はアリストテレス風の論理学を（少なくとも）包含している。

（3）自殺を諫止する「論理学」

ここまでのところでは、「自殺」に直接言及せずに、デューイにおける論理思想と倫理的分野・当為論との微妙な関係をみてきた。以下ではデューイの論理思想において、「目的設定という課題がある」としたことについて、自殺との関連で考察をしよう。

既に、動機において自殺のあれこれを分類しようと試みた。そこでは抽象的厭世自

自殺と、そうでないものとが大きく区別された。そして私は、抽象的厭世自殺をより重視すると書いた。しかし目的設定の課題と関連するのは、抽象的厭世自殺ではないような種類の自殺である。

デューイは目的それ自体も実現されれば、更に先に続く人生における現実的条件と「成る」のであって、「更に先」的視点から目的の考察がなされるべきであると主張している。それは〈目的と手段の連続〉(TV ch. 6)の主張である。つまり〈現実的に達成された目的は、将来の諸目的への手段である〉(TV p. 229)。自殺とそれによって達成された目的は、(来世という信仰を置かない限り)更に先に続く人生における手段となることが原理的にできない故に、自殺は行為選択肢たる可能性をあらかじめ閉ざされているのだと論じることは、しかしながら安易な途として避けるべきであろう。デューイは目的設定の評価方法を論じているのであって、一般的な目的自体の本質を語ろうとしているのではない。探究を生起させた状況を成功的に解決するならば、その時目的の遡行は実質的に止み、従って〈無限遡行〉(TV p. 231)は生じないともデューイは言っている。従ってもし自殺が探究を本当に成功的に終結させるならば、実現された目的に更に先がないからという理由では、試行を禁止する理由にはなり得ない。

また、自殺の場合探究は成功的に終結できない、なぜなら成功的終結を認める主体がその時存在しないのだから、というような論法も、あまりに事態を形式的にとらえ過ぎているという同様の理由から受け容れがたい。これは別分野の探究でも当然見られるであろう、「とりかえしのつかない実験・試行」という問題である。そういう実験で、必要な慎重さを要求することはあり得ても、全面的な試行禁止は強制できるわけではない。

そういったあまりに形式的な反応をしていても、事は解決しない。それらの擬似的解決が形式的なものに見える理由は、自殺を一概に禁止しようとしているからだと考えられる。

自殺は、それが目指された個々の事例に即して検討されなければならない。他者に利益を与える目的で計られる自殺は、一方では受益的であっても遺族ないし残される者としての悲しみや孤独感、また实际的危険(実害)として連鎖自殺といった影響を予想することができる。こうしたマイナス材料について、今計画されている自殺の影響量を正確に予想するのは難しいとしても、過去に遂行された自殺と残された者の調査によって確率的な想定は不可能ではないであろう。「調査結果による悲哀量は、与えようと考えていた利益量をはるかに凌駕している」と、自殺志願者によってみなさ

れるに至るという事態は十分に想定可能である。そして調査の必要が提示されただけでも、自殺の決意が鈍るということがあり得よう。

また自分に利益を与える目的の自殺は、受益主体が消滅するという理由から、通常ではあまり問題にされない種類の自殺ではないかと私は思う。しかし受益主体の消滅を、異議を唱える余地がまったくない仕方論証する（靈魂不滅の否定を論証する）ことは難しいと思う。だが今の問題の位置が、ここ（靈魂不滅の当否）にあると考える余地は少ない。この場合に、自殺志望者本人の自覚内容として、自殺という手段が、最高度に価値を実現できるという情勢判断（評価）が多く見られるだろう。しかしこういう時に使われる「最高度」という形容には、実質の意味がほとんどない。そこには、自殺が最終手段的であることが、直接に最高度の実現を意味するという連想的直感判断があるかもしれない。だが自殺以外の選択肢による（自殺よりも）ベターな手段の模索は、少なくとも自殺という手段による最高度の価値実現という指定を相対化するであろう。かかる相対化に基づいて、別の手段を発見しようとデューイ的論理学は試みるであろう。（そうした試みが成功するかしないかは状況による。）

今例に挙げた他者利益的-目的的-自殺と自己利益的-目的的-自殺は、広い意味での目的的自殺において、目的を吟味することと、手段を吟味することによって自殺行為を諫止することであった。しかし抽象的厭世自殺においてはどうなるであろうか。この種の自殺を特徴付ける時に、私は「人生における諸意味付けの、完全な放棄でもある」と書いた。人生における価値も反価値もひっくるめて、両方に対する積極的な意味付けを放棄しているわけである。それは目的に関与することに興味を示さず、その意味でまったくの無関心・能動的要素の完全な欠如を結果する。こうした者にとって、未来における「成功」や「幸福」が成立する可能性自体が、考慮されていないのである。

こうした態度は、結果的にデューイの論理思想とはなはだしく対立すると思われる。そこには何の接点もなく、そもそも接点の「可能性」がないように思われる。もしかしたらこの自殺志願者は、論理学者として、「価値も反価値も無意味である」という考え方を仮説的なものと認め、デューイ論理学的に反駁され説得され得るという開かれた態度で公共的な検討に臨むかもしれない。けれどもデューイ的論理学は、この自殺計画の考え方に対して全面的に無力である。論理学的過程は、デューイにとって目的遂行的探究過程なのである。しかしこの種の自殺志願者が提出している仮説は、目的遂行的探究それ自体を否定している。成功性の当否によって探究過程を吟味するデューイ的論理学が、成功が存在することを原理的に否定する仮説を処理することがで

「論理学」による自殺の諫止（麻生）

きるわけがないのである。開かれた未来自体と成功が存在し探究者を待っているということは、デューイ的論理学の体系にとって、最初から仮定されている。

ここからデューイ的論理学の特異な点が浮かび上がってくる。デューイが目指したものは、少なくとも成功自体は前提して、その獲得に励む者のための論理学である。日常生活をより良く生きよう（死のう）と前向きに努める人生のためのものである。この姿勢が満たされているならば、デューイ的論理学は自殺といった行為選択肢さえ積極的に討論し諫止の可能性を認める。諫止と言っても、一方的な非難に終わるのではなく、実験・調査を通じて志願者の仮説や思い込みを修正し、探究結果を通じて説得を試み合意を迫るという積極的なものである。しかるに抽象的厭世自殺と名付けた種類の自殺については、真のデューイ的論理学者ならば（論理学的見地からは）沈黙を守るほかない。

しかしこのことを、私は欠点であるとは思わない。彼の哲学はできることに真摯に取り組み、避け得る自殺を避けるための明確な方法を提示しようとした。そのようなものとして、むしろ私は積極的に評価したいと思う。

かくてデューイの論理思想を自殺の諫止に即して検討した結果として、次のことが明らかになったと考える。すなわち、第一に、或る一定の未来を前提して、その見地から成功や幸福や価値を見、そうすることによって現在行うべきかどうか考察する行為選択肢の問題を判断できる、ということである。これは、デューイ論理学を用いて、人を納得させる結論を導き出そうとするならば、その者の行為への態度において、未来的な積極的なものをもち、しかも目的への価値（観）を共有する必要性を示すものである。そして第二に、論理学はこうした形で目的を共有する限りにおいて、その行為の帰結を調査し、評価を与えることによって論理学的考察を行っていくのであるということである。既にここまでで概略を示し得たように、論理学は、（例えば自殺の是非といった）行為選択肢についての具体的な検討材料が与えられている場合には、実質的に倫理学を展開することにもなるのである。また以上の考察から、未来への積極的な精神態度が、論理学遂行上で必要⁽³⁾であることについては、明確にし得たと考えるのである。

注

- (1) 本稿は、平成10年11月8日、哲学会37回研究発表大会において発表したもの(旧題「論理学によって自殺を諫止する可能性～デューイの論理思想に基づく考察」)に、若干の修正をしてみたものである。

「論理学」による自殺の諫止（麻生）

（2）論理学にとって外的なものが具体的に何になるか（外部性と内部領域の範囲確定）は大きな問題である。しかし今はこれを論じない。

（3）複数の方から、この「未来への積極的な精神態度」について、次のような指摘を受けた。すなわち抽象的厭世自殺の「傾向をもつ」自殺志願者が自殺行為に踏切るに至る場合、「常に既に」そこには、積極性が或る形で入ってこざるをえず、本稿に言う「抽象的厭世自殺」は、完全的かつ絶対的意味では、成り立たない。そして、あくまで「抽象的」理論世界においてだけ成立するものであるはずではないか、というものである。その考え方に従えば、このように「抽象的厭世自殺」の論理的不可能性を「論証」することを通して、それが「自殺としては」存しないので、あらゆる自殺の型を網羅的にデューイ的論理学はカヴァーし、扱い得る、ということになる。

デューイの論理学は、一面では、確かにこの考え方を首肯しなければならないし、例えばデューイ本人は積極的な賛意を示すかもしれない。それはデューイの哲学における人間観ともからみ、またアメリカの楽観哲学との「評」にもからむであろう。（そして、さらなる解釈を要し、本稿では扱いきれない課題となる。）そしてまた、本文において、デューイ的論理学が「開かれた未来自体と成功が存在」することを「仮定」と書いた時、この仮定内容の“自明性を前提”しているところからも、それを私自身も容認せざるをえないし、この考え方に共感する面も少なしとしないのである。

しかし、他面では、そのような機械的論証は、本稿の非常に警戒するところでもある。抽象的厭世自殺が、分析的概念的に成立し得ず従って存在しないかどうかは、実際的には、非常に難しい。個々のケースを、調べもせず一概に否定的にとらえるのではなく、慎重に熟慮検討を行った上で、「この事例は抽象的厭世自殺ではない」と判断していくべきであろう。一事例がもつ複雑な全体相に丁寧当たることの重要性を、私は強調したいのである。（ともあれ、このような有益な指摘を下さった諸氏——氏名はいちいち記さないが——に感謝する。）